

主 論 文 要 旨

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	吉 田 和 生
主 論 文 題 名				
Resilience in schizophrenia: A comparative study between a remote island and an urban area in Japan (統合失調症におけるレジリエンス：日本における離島と都市部との比較)				
(内容の要旨)				
<p>近年、レジリエンス（社会心理的ストレスに対する抵抗力、回復力）という概念が精神科領域でも重要視されるようになってきている。このレジリエンスは社会心理的因子を含む様々な因子によって影響されると考えられている。これまで、統合失調症の経過に影響する因子としては、都市化やトラウマ体験などの環境因子が報告されているが、統合失調症におけるレジリエンスに関連する因子について報告した研究は少ない。さらに、レジリエンスの環境による違いに着目した研究はこれまで皆無である。そこで、本研究では、異なる環境下でのレジリエンスの違いを調査し、レジリエンスに関連する因子を特定することを目的とした。具体的な方法として、日本の伊豆大島（離島）と東京都都市部という異なる2つの地域における統合失調症患者（年齢および性別をマッチング）のレジリエンスレベル（レジリエンス評価尺度を用いて合計スコアを算出）および人口統計学的特徴、症状重症度、生活の質、生活習慣、生物学的データ（脳由来神経栄養因子（brain-derived neurotrophic factor:BDNF）、唾液中αアミラーゼ（salivary alpha-amylase:SAA））等を対応のあるt検定またはカイ二乗検定を用いて比較検討した。さらに、統合失調症のレジリエンスレベルに関連する因子について、重回帰分析を用いて解析検討した。結果、80名の統合失調症患者が組み込まれた（2群それぞれ40名ずつ）。精神科入院回数、社会資源の活用頻度、血漿中BDNF値等のいくつかの因子については2群間で有意差を認めたものの、レジリエンスレベルは2群間において有意差を認めなかった（大島群103.9 ± 26.1；都市部109.4 ± 22.3；$p=0.32$）。また、重回帰分析の結果、生物学的データや症状重症度などはレジリエンスレベルとの有意な関連性は示さなかったが、罹病期間の長さおよび生活の質の高さがレジリエンスレベルの高さと有意に関連していた（それぞれ$p=0.037$と$p=0.016$）。</p> <p>本研究は横断研究であるため、因果関係を議論できない点や未治療期間およびIQなど未測定因子がレジリエンスに影響した可能性がある点などいくつかの限界はあるものの、長い疾病経験とその経過の中における疾病への良好な順応という因子が統合失調症のレジリエンスに関連することが示唆された。今後、これらの因子とレジリエンスに関してさらなる研究が必要である。</p>				